令和５年度の研究（または活動）内容

生活環境と一体となった身近な地域文化財や伝統文化は、長い年月をかけて地域で醸成されたサステイナブルな「伝統知」を備え、地域文化財には「持続可能な地域づくり」のヒントが秘められている。本プロジェクト研究所は建築史、地域防災、環境保全、映像学、歴史資料学といった、人文学と建築学、環境学にまたがる異分野融合と地域連携を重視し、「文化財の価値を守り、未来へ伝え、持続可能な地域づくりへ活かす」という複合新領域の形成を目指すものである。

各地の研究活動としては、以下に示すように、初年度以来の地域や体制を継続している。一方、本年度は学内公募研究の採択を得て、宮城県塩竈市の文化財を評価し、まちづくりへつなげるプロジェクトを実施し、浦戸諸島の神社建築や離島のランドスケープなどこれまで着目されることのなかった新たな文化財を発見・評価する活動も広げることができた。

以下、地域・異分野融合の枠組みごとに、本年度の活動を述べていく。

1）　歴史的町並みの文化財的価値を守る防災計画　：　文化財保存×地域防災　【青森県弘前市】

2021 年度に弘前市の文化財防災計画調査を受託し（建築学科・中村＋生活デザイン学科・畠山＋横浜国立大学＋弘前大学＋工学院大学）、2022 年度末にその成果を『弘前市仲町伝統的建造物群保存地区防災計画見直し調査』として報告書にまとめた。本年度は、その調査成果を受けて、弘前市の法定の保存地区防災計画づくりに協力した。

その中で課題として見いだされたのが、伝統建築や古い屋敷構え独特な町並みにおける「防災訓練」のあり方であった。防災訓練は法定の防災計画とセットで重要であり、かつ防災意識向上にも有効である。また、歴史的町並みにおける防災訓練の実践という点は研究視点としても新規性をもつ。そこで、町並み保存地区の活用イベント「武家住宅を楽しむ　町並みフェア」で地区住民が集う場を活用し、現状の避難訓練の改善点をヒアリングした。これらの成果を活かし、2024 年度の防災訓練では、燃えやすい茅葺き民家やその周辺家屋の状況を想定した「発災対応型訓練」が実現できるよう、地元町会と現在、準備を進めている。

2）　地域の魅力を伝える映像づくり　：　建築学×映像学　【宮城県登米市】

2022 年度までに登米市公式のシティプロモーション・サイトに歴史的町並みを守り、活かす取り組みや人々を紹介する動画集を公開している（経営コミュニケーション学科・猿渡研究室）。その映像のひとつに、地元青年会による観光人力車の取り組みがあったものの、コロナ禍の影響で、観光人力車の運行が休止されていた。本年度は大学の地域活動も再開されたこともあって、地元青年会の指導・協力のもと、「学生ボランティア人力車」を試行した。建築学生が建物や町並みの特色を観察し、ボランティアガイドとして町並み解説をしながら人力車をひく活動とした。まちづくりの映像記録づくりの作業がひとつのきっかけとなり、休止されていた活動がスムーズに再開された事例となった。

建築学生が町並みを学び、解説する「学生ボランティア人力車」の実施の様子とフライヤー

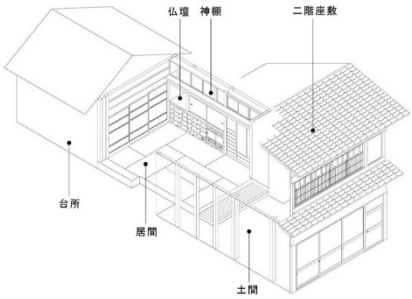
3）　SDGs環境学習プログラムの実践　：　文化財保存×環境工学【宮城県石巻市】

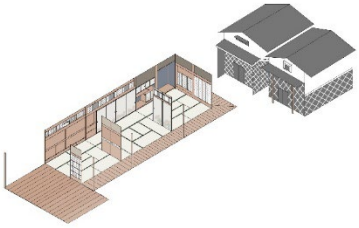
環境生態工学研究所が主催する北上川河口域の茅刈り体験学習会に、環境応用化学科・山田研究室と建築学科・中村研究室の学生が参加し、水環境と建築学双方の領域にまたがる学生の実践的な学びの場となった。また、2022 年度に刈り取ったヨシを用いて、涌谷町指定文化財である茅葺き民家「旧佐々木家住宅」で「ほうきづくり」のワークショップを近隣の小学生向けに実施した。蚊帳などの昔の住まいの体験を促す装置も配置し、環境学習の場（文化財民家）と体験が調和する企画となった。

文化財民家で実施した北上川のヨシのワークショップとそのフライヤー

4）　地域文化財の新たな価値評価手法 ： 建築史×資料学 【岩手県奥州市、宮城県塩竈市】

2022 年に発行した文化財調査報告書に基づき、旧高野家住宅（岩手県奥州市）が国有形文化財に登録され（2024 年 3 月答申）、学術的な価値評価の研究活動が文化財保存の実践に結び付く事例となった。また本年度は、学内公募研究を活用し、塩竈市の町家や浦戸諸島の神社建築といった、新たな文化財価値の発見・記録作成も取り組んだ。とくに多層的な文化財価値をもつ町家では、その価値を表現する作図手法も吟味し、仙台箪笥や建具、仏壇などの家具調度品が織りなす価値をビジュアライズする手法開拓を意識した。





塩竈町家の実測調査とその図面表現